

2) 湖中アユのピブリオ病について

里井晋一・二宮浩司・高橋 誓

【背景・ねらい】夏期に琵琶湖で発生した湖中アユの斃死の状況把握と直接的な原因であるピブリオ病の天然水域での感染発生機構の解明を行う。

【成果の内容・特徴】

(1) 経過

7月19日にマキノ町の百瀬漁協から、マキノ町地先の湖中でアユの死魚が散見されるとの情報を得たので、7月20日から7月29日まで斃死状況の調査を実施した。

7月20日には、マキノ町沖の水域で斃死魚が点在していた。湖中とともに今津町今津浜地先、今津港地先の湖岸においても斃死魚が散見された。

7月21日には、鶴川と愛知川を結ぶ線上から北の水域で斃死魚が発見できたが、びわ町沖、マキノ町沖で比較的多く発見できた。

7月25日には、湖中の斃死魚は減少しており、彦根市沖から湖北町沖にかけての水域で若干の斃死魚が見られただけであった。

7月26日には、湖岸においても斃死魚は減少しており、宇曾川河口、西浅井町飯浦港地先、マキノ町百瀬地先でほんの少数の斃死魚を発見しただけであった。

7月29日には、斃死魚はさらに減少しており、湖岸において、びわ町南浜地先、西浅井町飯浦港地先でほんの少しの斃死魚を確認したのみであり、湖中アユの斃死がほとんど終息したものと思われた。なお、湖中アユの斃死発生期間中の彦根地先における湖岸水温は26.5℃～28.9℃の範囲であった。

(2) 推定斃死数量

湖中および湖岸域での斃死尾数は約58,000尾、斃死重量は約262kgと推定された(表1)。

(3) 斃死原因

多くの斃死魚の体表に出血性の炎症が認められたことから細菌検査を実施した。その結果、*Vibrio anguillarum*(A)が17検体中全てから検出されたため、直接的な原因はほぼ、*Vibrio anguillarum*(A)によるピブリオ病であるものと思われた(表2)。

(4) ピブリオ菌の保菌状況調査

4月～7月にかけてエリ、ヤナ、沖スクイ網等で漁獲された646検体に対して調査を行ったが、湖中で斃死が起こる直前の7月18日において1検体から検出されただけであった。

【成果の活用面・留意点】湖中でのピブリオ病の発生予察を行うためには、より精度の高い手法を用いて、湖中でのピブリオ菌の分布生態やアユの保菌状況を把握する必要がある。

表1 湖中アユの斃死調査結果

調査年月日	調査場所	斃死尾数(尾)	斃死重量(kg)
H6.7.20	湖中、湖岸	6,425	29
7.21	湖中	46,400	209
7.25	湖中	4,000	18
7.26	湖岸	1,060	5
7.29	湖岸	219	1
合計		58,104	262

表2 斃死魚の細菌検査結果

調査年月日	7/20	7/21	7/26	計
検体数	13	3	1	17
V. a. (A)	13	3	1	17
その他	0	0	0	0